THE FUKUOKA
ASIAN CULTURAL PRIZES

第8回
福岡アジア文化賞

THE 8th
FUKUOKA ASIAN CULTURAL PRIZES

1997

大　　賞

GRAND PRIZE

チェン・ポン

クメール精神文化研究所所長

1930年3月6日生

カンボジア王国

CHHENG Phon

Director of the Centre for Culture and Vipassana

Born March 6, 1930

Kingdom of Cambodia

略　歴

1930	コンポンチャム州に生まれる
1955	国立師範学校を卒業後、教師
1960	中国にて芸術文化の研究を終了
1964	プノンペン王立芸術大学民俗舞踊団創立
1968	プノンペン王立芸術大学教授
1972	クメール芸術家協会会長
1973	国立演劇学校校長
1979	コンポントム州文化情報局長
1980	プノンペン芸術学校校長
1981	文化情報省副大臣
1982-91	文化情報大臣
1989	クメール文化の啓発・保護に対して栄誉賞（最高の国家賞）
1992	国立教育文化評議会より名誉教授の称号
1993	国立文化評議会委員
1993-94	プレア・シハヌーク学院上級顧問
1994-	クメール精神文化研究所所長

主な創作

・クメール民俗・大衆舞踊を20点創作
・大衆劇「イーケー劇」4篇（1969-75）、「バーサック劇」5篇（1970-75）
・近代戯曲「クメール史の過程」（1991）

主な著作

『クメール芸術文化の基本研究』王立芸術大学，1966
『クメール民俗芸能：クメール音楽・舞踊』王立芸術大学，1967
『クメール芸術文化の真価』（学位論文）王立芸術大学，1968
『クメールの影絵芝居』王立芸術大学，1973
『クメール芸術文化の指針と展開』文化情報省，1981
『クメール文化2000年の展望』文化情報省，1985
『プー・クン：真のクメール農民』（口承劇作品）文化情報省，1990
『クメール人の生活の中の芸術と文化』クメール精神文化研究所，1994
『文化と協力を通じた平和構築』クメール精神文化研究所，1994
『仏陀の教えと魂』クメール精神文化研究所，1994
『クメール的道徳・美徳・知恵による堕落追放』クメール精神文化研究所，1994
『40の問い・40の答え』クメール精神文化研究所，1994
『ブラーマビハーラ・ダルマ（4つの荘厳な篤信）』クメール精神文化研究所，1995
『アンコール期におけるクメール人指導層の十戒』クメール精神文化研究所，1995
『魂の救済の7つの段階』クメール精神文化研究所，1995
『宗教と文化と開発』クメール精神文化研究所，1996

※1990年以前の出版は全てプノンペン、1994年以降の出版は全てタクマウにて出版

贈賞理由

チェン・ポン氏はカンボジアを代表する劇作家であり、また古典芸術研究の教授である。同時に脚本家・演出家・喜劇役者も兼ね、伝統文化再活性化の主唱者でもある。1975年からのカンボジアでは伝統文化が否定され、それまでの村落社会が破壊されたが、同氏はこれら村落を伝統文化の面から再構築する活動を推進し、悲惨な体験を受けた心病める人々を勇気づける精神復興を提唱、さらに有形・無形の文化財の保存修復のための人材養成に尽力してきた。

チェン・ポン氏は1930年コンポンチャム州に生まれ、苦学して1955年国立師範学校を卒業、中国留学後は、若くしてプノンペン王立芸術大学教授、クメール芸術家協会会長、国立演劇学校校長などの要職を歴任した。1970年には大阪万博にカンボジア舞踊団を率いて来日。1975年以降のポル・ポト政権下では、コンポントム州の集団農場で強制労働に従事させられた。ポル・ポト時代が過ぎ去った後、国内混乱で孤児となった子供たちを収容する芸術学校を開き、村落へ戻った楽士・舞踊士・影絵芝居伝承者などを集め、伝統民俗芸能者を育成する体制の確立に寄与してきた。さらに文化情報大臣に就任してからは、カンボジアの有形・無形文化財の保存を推進するプノンペン芸術大学（旧王立芸大）を1989年に再開。特に考古・建築の両学部の再開を通じて、アンコール遺跡の保存修復を行う若い専門家の指導育成に大きく貢献した。

チェン・ポン氏は1992年に政治から引退後、私財を投じてプノンペン市近郊の自宅にクメール精神文化研究所を創設した。現在、クメール的道徳と精神など目に見えない内発的価値を復活させ、瞑想によって汚れた精神や病んだ心を癒し清めようとする実践活動を行っている。同氏はこうした活動を通じてアジアの中におけるカンボジア文化の独自性を明らかにしようとする壮大なスケールの思想家であり、実践者でもある。

1993年、チェン・ポン氏率いるカンボジア影絵芝居と古典舞踊団のニューヨーク公演はカンボジア再生をアピールする意味で好評を博した。また国際交流基金の「アンコール遺跡シンポ」などの国際会議においても、同氏は「カンボジアの文化復興はカンボジア人の精神復興である」と唱えて、出席者に大きな感銘を与え、高い評価を受けてきた。また、同氏が民間伝承の民話や村踊りなどに基づき創作劇脚本を書き下ろし、各地で上演していることも特筆すべき貢献である。特に著作・公演・対話を通じてクメール的価値の再発掘に尽くした功績は大きい。

このようにチェン・ポン氏の業績は、カンボジアにおける伝統文化および古典芸術に現代的普遍性を付与し、アジアの伝統文化の保存を継承し、理論的実践的枠組みを提示・集成したものと高く評価できるものであり、まさに「福岡アジア文化賞－大賞」にふさわしい優れた功績といえる。

学術研究賞・国際部門

ACADEMIC PRIZE : INTERNATIONAL

ロミラ・ターパル

ジャワハルラール・ネルー大学名誉教授

1931年11月30日生

インド

Romila THAPAR

Professor Emeritus of Jawaharlal Nehru University

Born November 30, 1931

India

写真撮影:デジビル・シン
Photo:courtesy of
Tejbir Singh

略　歴

1931　ラクナウに生まれる
1952　パンジャーブ大学文学士
1955　ロンドン大学東洋アフリカ研究学部文学士
1957　敦煌等、中国の仏教窟院調査
1958　ロンドン大学哲学博士
1959　ロンドン大学南アジア古代史講師、王立アジア協会特別研究員
1961　クルクシェートラ大学インド古代史上級講師
1963　デリー大学インド古代史上級講師
1968　英国東洋学研究者協会古代南アジア部会長
1969　インド歴史学会議インド古代史部会長
1970　ジャワハルラール・ネルー大学インド古代史教授
1980　ユネスコ国際人類科学文化史委員会副会長
1983　インド歴史学会議会長
1993　ジャワハルラール・ネルー大学名誉教授

主な著作

『アショーカ王とマウリヤ帝国の衰退』(学位論文), オックスフォード大学出版会, デリー, 1961
『インドにおける歴史叙述の諸問題』(編), デリー, 1963
『インド史』 第1巻, ペンギン・ブックス, 1966 (邦訳『インド史1,2』みすず書房, 1970,72)
『古代インド』NCERT ニューデリー, 1966 (中学校用教科書モデル)
『中世インド』NCERT ニューデリー, 1967 (中学校用教科書モデル)
『過去と偏見』ニューデリー, 1975
『古代インド社会史：いくつかの解釈』オリエント・ロングマン, ニューデリー, 1978
『流浪と王国：ラーマーヤナをめぐるいくつかの省察』バンガロール, 1978
『リニィジから国家へ』オックスフォード大学出版会, デリー, 1984
(邦訳『国家の起源と伝承－古代インド社会論』法政大学出版局, 1986)
『インド史を位置づける』(編), オックスフォード大学出版会, デリー, 1986
『マウリヤ帝国再訪』カルカッタ, 1987
『文化交流と初期インド』オックスフォード大学出版会, デリー, 1987
『初期インドを解釈する』オックスフォード大学出版会, デリー, 1992
『初期インド史研究の到達点』(編), ボンベイ, 1995
『歴史のメタファーとしての時間：初期インド』オックスフォード大学出版会, デリー, 1995

贈賞理由

ロミラ・ターパル氏は、現代アジアを代表する歴史学者であり、インド史とりわけインド古代史の研究者として国際的に令名が高い。同氏のインド史研究への大きな貢献として、次の三点を指摘できる。

第一は、インド史研究における研究視点の革新である。ターパル氏以前つまり独立以前のインド史研究は、大きく二つの視点から進められてきた。一つは、支配者であるイギリス人研究者からの視点であり、インド社会をいわば「ヨーロッパが失った歴史的事実を今に伝える倉庫」としてとらえる停滞史観である。もう一つは、イギリスに対抗する独立運動の中から生まれてきたインド人研究者からの視点で、イギリス支配以前のインド社会を牧歌的な麗しい社会として描くものであった。同氏は、この二つの視点に代わる新たな実証的歴史学の構築に邁進してきた。

第二は、インド史を、単にインド世界の歴史としてだけではなく、人類史を構成する地域史として位置づける試みに成功したことである。特に従来のインド古代史は、史料としてはサンスクリット文献に密着し、手法としては歴代王朝の事跡を辿る王朝史であった。ターパル氏は、口承資料を含む諸史資料も渉猟して、それらを文化と結びつけて解釈することを試み、さらには歴史理論にくわえて文化人類学・社会学の成果も援用して、世界の中のインド史を再構築することに成功した。

第三は、ターパル氏の歴史叙述が広い展望と躍動性に満ちていることである。同氏は、諸史料から抽出した事実を開示すると同時に、それらの事実群が相関しあって織りなす全体的な構造を巧みにかつ説得的に提示する。それは、希有な歴史家のみがなしうる歴史の叙述である。同氏が各国において名誉博士・名誉研究員の栄誉を受けるとともに、日本においても同氏の邦訳された著作がインド研究者以外にも広い読者を持つのは、その故である。また同氏は、数次の来日によって多大な影響を日本の研究者に与え続けている。

このように、ロミラ・ターパル氏のインド史研究の進展、ひいては世界の歴史学研究の進展への寄与はまことに大きく、まさしく「福岡アジア文化賞－学術研究賞・国際部門」にふさわしい業績といえる。

学術研究賞・国内部門

ACADEMIC PRIZE ： DOMESTIC

樋口（ひぐち） 隆康（たかやす）	HIGUCHI Takayasu
奈良県立橿原考古学研究所所長	Director of the Archaeological Institute of Kashihara, Nara Prefecture
京都大学名誉教授	Professor Emeritus of Kyoto University
1919年6月1日生	Born June 1, 1919
日本	Japan

略　歴

1919	福岡県添田町に生まれる
1943	京都帝国大学文学部史学科卒業
1950-57	京都大学文学部講師
1957	日本考古学訪中視察団の一員として敦煌、成都等視察
1958	インド仏跡調査
1957-75	京都大学文学部助教授
1962	京都大学文学博士
1970-78	京都大学中央アジア学術調査隊参加
1975-83	京都大学文学部教授
1983-	京都大学名誉教授、泉屋博古館館長
1985	和歌山市文化賞
1989	ＮＨＫ放送文化賞
1989-	奈良県立橿原考古学研究所所長
1990-	シリア・パルミラ遺跡調査
1992	京都府文化賞特別功労賞
1992-	京都府文化財保護審議会会長
1993-	シルクロード学研究センター所長
1995	大同生命地域研究賞
1995-	京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長

主な著作

『大谷古墳』（共著），和歌山市教育委員会，和歌山，1959
『中国の銅器』中央公論社，東京，1967
『インドの仏跡』朝日新聞社，東京，1969
『北京原人から銅器まで』講談社，東京，1969
『日本人はどこから来たか』講談社，東京，1971
『古鏡・古鏡図録』新潮社，東京，1979
『ガンダーラへの道』旺文社文庫，東京，1980
『バーミヤーンの石窟』同朋舎，京都，1980
『ガンダーラの美神と仏たち』日本放送協会出版，東京，1986
『シルクロード考古学　全5巻』法蔵館，京都，1986
『シルクロードを掘る』大阪書籍，大阪，1987
『大陸からみた古代日本』学生社，東京，1990
『三角縁神獣鏡綜鑑』新潮社，東京，1992
『始皇帝を掘る』学生社，東京，1996

贈賞理由

樋口隆康氏は、シルクロード・中国・古代日中交流史などの考古学的研究において、現代日本を代表する数少ない国際派考古学者の一人である。同氏は、幅広く、常に先進的・行動的な数多くの調査と優れた研究業績によって、国際的にも高い評価を受けている。

樋口氏は、学生時代から日本列島の古墳文化の調査や研究に従事する一方で、中国大陸や中央アジアの考古学へと関心を広げていった。中国考古学の分野では、古銅器や古鏡の研究に情熱を傾注し、多くの先駆的で独創的な研究を残してきた。またシルクロード研究のため、インドから中央アジア・西アジアまで、たびたび現地調査に参加し、特に、1970年以後は京都大学中央アジア学術調査隊長として、パキスタンのガンダーラ地方やアフガニスタンのバーミヤンの仏教遺跡調査を実施して、数々の重要な学術成果をもたらした。そして現在もなお、シルクロード学研究センターの初代所長として、シリアの古代交易都市パルミラの発掘調査の陣頭指揮を取っている。

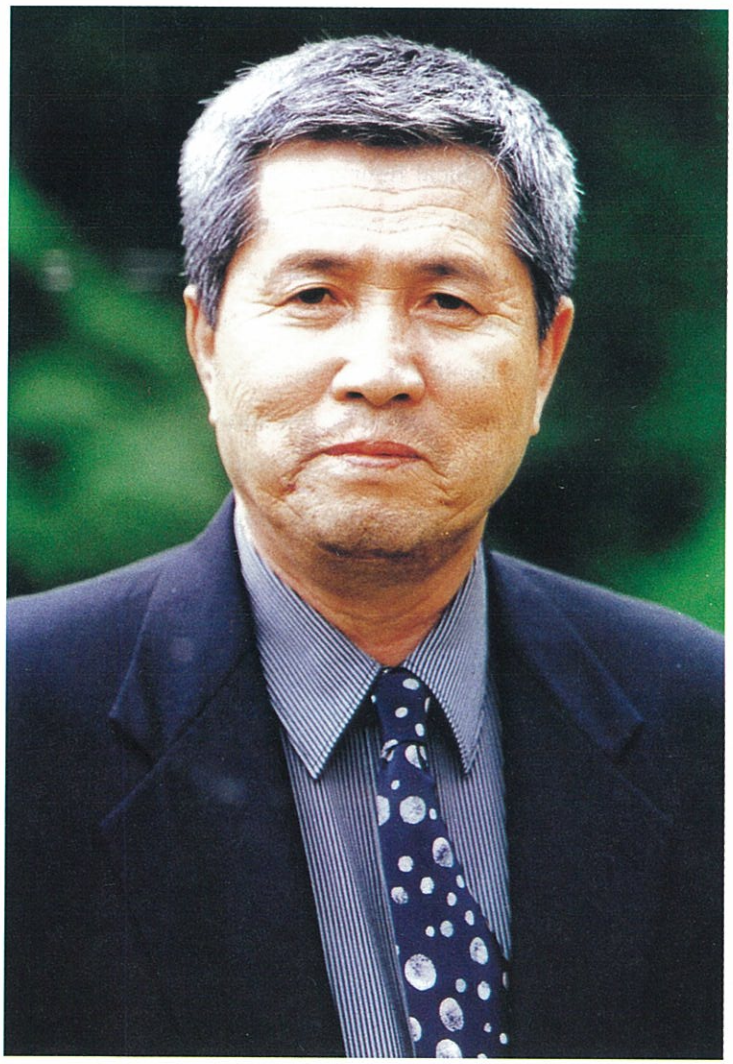
さらに、日本と中国の古代交流史についても造詣の深さを示し、稲作・銅鏡・馬具・仏教などの諸分野における的確な問題提起を続けてきた。最近では三角縁神獣鏡を邪馬台国の女王卑弥呼に魏王朝から下賜された鏡とする「魏鏡説」、ひいては「邪馬台国近畿説」を主張している。このような樋口氏の調査・研究の業績は実に多岐にわたるが、一貫してフィールドワークと考古学的事実を重視しながら、常に自由な発想に基づいた斬新かつ独創的な所説を提示し、国際会議等を通じてアジア諸地域の考古学・古代史学界に少なからず影響を与えてきた。

樋口氏はまた、奈良県立橿原考古学研究所所長や京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長として日本考古学の調査・研究と文化財保護に携わる一方、カンボジアのアンコール遺跡の修復やアフガニスタンの仏教遺跡を戦禍から守る運動など、世界的な文化遺産の保全にも積極的な支援を惜しまない。

このように、樋口隆康氏の、シルクロードや中国の考古学研究の深化はもとより、古代日中交流史の解明にも先導的な役割を果たしてきた功績は多大であり、まさしく「福岡アジア文化賞－学術研究賞・国内部門」にふさわしいものといえる。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

イム・グォン テク 林　権　澤	**IM Kwon-taek**
映画監督	**Film Director**
1936年5月2日生	**Born May 2, 1936**
大韓民国	**Republic of Korea**



略　歴

1936　全羅南道長城郡に生まれる
1962　『豆満江よ、さらば』で監督デビュー
1974　『証言』大鐘賞特別賞
1977　『洛東江は流れるのか』韓国演劇映画芸術賞監督賞
1978　『族譜』大鐘賞監督賞・作品賞
1979　『旗のない旗手』大鐘賞最優秀作品賞
1981　『曼陀羅』大鐘賞監督賞・作品賞、ベルリン映画祭本選出品
1985　『キルソドム』大鐘賞作品賞
1986　『キルソドム』韓国演劇映画芸術賞最優秀作品賞、シカゴ国際映画祭世界平和メダル賞、ベルリン映画祭本選出品、『チケット』大鐘賞監督賞
1987　『チケット』映評賞監督賞、『シバジ』アジア太平洋映画祭監督賞・最優秀作品賞
1988　『アダダ』百想芸術大賞作品賞
1989　大韓民国文化勲章宝冠章、『ハラギャティ』大鐘賞最優秀作品賞
1991　『開闢』大鐘賞作品賞、青龍賞監督賞
1992　フランス文化芸術功労勲章
1993　『風の丘を越えて～西便制』百想芸術大賞作品賞、大鐘賞最優秀監督賞、映評賞最優秀監督賞、青龍賞大賞・最優秀作品賞、上海国際映画祭監督賞
1994　『太白山脈』青龍賞作品賞、春史映画芸術作品賞
1995　『太白山脈』ベルリン映画祭本選出品
1996　『祝祭』映評賞最優秀作品賞、青龍賞最優秀作品賞・監督賞、百想芸術大賞監督賞

主な監督作品

『豆満江よ、さらば』1962　『雑草』1973　『証言』1973　『族譜』1978
『チャッコ』1980　『曼陀羅』1981　『キルソドム』1985　『シバジ』1986
『アダダ』1987　『ハラギャティ』1989　『開闢』1991
『風の丘を越えて～西便制』1993　『太白山脈』1994　『祝祭』1996　等、計95本

贈賞理由

林権澤氏は今日の韓国映画を代表する監督であり、アジア映画界の巨匠たちの一人であり、ひいては広く世界でも特に注目される映画作家たちの中の重要な一人である。

林氏は1936年に韓国の全羅南道の長城に生まれた。少年時代に韓国に起こったイデオロギー的な闘争に巻き込まれた同氏は、厳しい辛酸をなめながら成長したのち1950年末に映画界に入り、下積みの仕事から叩き上げて1962年に監督になった。以来、非常に多くの映画を作り、初めは商業映画作家と見られていたが、1970年代に入った頃からは現実を正しく見つめようとする芸術的な意欲でも注目されるようになった。特に1978年の『族譜』、1981年の『曼陀羅』などは、この国の民族的な精神のあり方を美しく、しかも稀に見る真摯さをもって追求、表現した作品として、韓国内にとどまらず、日本をはじめ広く国際的にも韓国映画の存在が注目される契機を作った秀作である。

その後、林権澤監督作品は一作ごとに内容の深みと表現の洗練を増し、国内外の多数の映画祭で受賞し、今日では世界各地で特集上映が行われるに至っている。『キルソドム』(1985年)、『アダダ』(1987年)、『開闢』(1991年)、『風の丘を越えて～西便制』(1993年)、『太白山脈』(1994年)、『祝祭』(1996年)、などは中でも傑出した作品だが、これらはいわば韓国の苦難の近代史・現代史であり、どんな悲惨な経験によっても排除されることのなかった民族の高貴な魂の記録であり、美しい伝統の表現である。そこには苦しい時代を生き抜いてきた同氏自身の体験の裏付けがあって、苦難を共にしてきた同胞に寄せる限りなく温かい畏敬の眼差しが感じられると同時に、それは人間と自然に寄せる普遍的な愛となって世界に受け入れられ、アジアの心の最も優れた芸術的表現の例として広く知られるようになっている。

このように、林権澤氏が韓国のみならずアジアの映画界に果たしてきた功績はまことに大きく、まさに「福岡アジア文化賞－芸術・文化賞」にふさわしい業績といえる。

公式行事スケジュール

行　事	日　時	場　所
○授　賞　式	9月25日(木) 午後2時30分～4時	アクロス福岡シンフォニーホール
○記　者　会　見	9月25日(木) 午後4時～5時	アクロス福岡6階606号会議室
○祝　賀　会	9月25日(木) 午後6時30分～8時	ホテルニューオータニ博多４階 「鶴の間・東、飛翔の間」
○記念講演会	9月26日(金) 午後6時～8時	アクロス福岡イベントホール
○舞　踊　公　演	9月27日(土) ①午後6時～6時20分 ②午後7時～7時20分 ③午後8時～8時20分	キャナルシティ博多「サンプラザ」
○ワークショップ		
・古代文明交流フォーラム 「パルミラから鴻臚館へ ～シルクロードの風～」	9月26日(金) 午後1時30分～4時30分	アクロス福岡イベントホール
・インド研究フォーラム 「変わりゆくインド・ 変わらざるインド」	9月27日(土) 午後1時～3時30分	福岡市役所15階講堂
・林権澤、小栗康平と語る 「アジアの表現が世界を変える」	9月27日(土) 午後1時50分～5時	福岡市総合図書館映像ホール（シネラ）
・カンボジア文化復興フォーラム 「クメールの微笑み」	9月28日(日) 午後3時～3時30分	イムズビル9階イムズホール

授　賞　式

日時：9月25日(木)　　午後2時30分～4時

場所：アクロス福岡シンフォニーホール

1997年(第8回)福岡アジア文化賞授賞式は、在日アジア各国大使御夫妻、留学生、学術・教育・芸術・文化関係者及び市民等約 800名の参加を得て開催された。式典では選考経過報告の後、主催者による賞の贈呈が行われ、受賞者の生い立ちや素顔、研究・芸術活動の一端を写真スライドで紹介し、受賞者の業績を讃えた。

各受賞者は、その挨拶の中で受賞の喜びや、福岡市及び福岡アジア文化賞へのメッセージ、アジアに対する思いなどを語った。

また、来賓による祝辞が述べられ、大賞受賞者チェン・ポン氏（カンボジア）の同行公演団によってカンボジアの影絵芝居「リムケー」、古典舞踊「アプサラ・ダンス」及び伝統民俗舞踊「ココナッツ・ダンス」が披露された。

受賞者挨拶

チェン・ポン

このたび「福岡アジア文化賞」の大賞をお贈りいただき、私にとっても私の国カンボジアにとっても大変名誉なことでございます。心から嬉しく、光栄に存じております。よかトピア記念国際財団の川合辰雄理事長、福岡市の桑原敬一市長並びに福岡アジア文化賞委員会の皆様、福岡市民の皆様に対して深く感謝申し上げます。

私は、劇作家であり、舞台俳優であります。私は自分の心の奥底を表現し、観客にその気持ち、感情をお伝えするのが私の役割です。舞台から観客を笑わせることができますが、私自身は笑うことはめったにありません。

俳優として、舞台の上で、死んでは生まれ、生まれては死に、笑っては泣き、泣いては笑い、幾度も繰り返してきました。現在では、涙も枯れ果てて、乾ききった笑いしか私には残されていません。

今まで、多くのものを見過ぎてしまいました。そして知り過ぎて、覚え過ぎたために、私の胸の痛みも大きいのでございます。現在、私の目はよく見えます。しかしもう何も見たくありません。私の耳はまだ健在です。しかし、もう何も聞きたくありません。私の五感の扉を閉じてしまいたいのです。そうすることにより、純粋な心が取り戻せると考えているからです。

福岡アジア文化賞は、私のその純粋で真実を追究する心、そして新たな文化に対する創造力を引き立ててくれる大きな励みであります。

福岡アジア文化賞は、アジアで育ってきた文化という花に息吹きを与え、色とりどりの花々、多種多様の香りを発する花々を咲かせることで、アジアを文化の花園に変えていくことでしょう。

そして、広大なアジアに住む人々をお互いにより近づけさせ、人々が互いに譲り合い、共に生きてゆき、そして寛容な心をもって平和な世界を作り上げることに貢献することになりましょう。

本日、この日本の地において、そして福岡という素晴らしい場所で、このような盛大な歓迎をいただき私は胸が一杯でございます。改めて皆様方に感謝申し上げたいと存じます。

ありがとうございました。

ロミラ・ターパル

御来席の皆様、

福岡アジア文化賞受賞のお知らせをいただきましたとき、私は本当に心から驚きました。それから、この賞について、より深く知るにつれ、また、過去にどんな方々が受賞したかを知るにつれて、大変に名誉なことだと感じるようになりました。まさにこの賞は、私のみならず、私と同世代のアジアの研究者たちが提唱してきた歴史観に対する賞賛のあかしだと、私は受け止めております。

私のインド古代史研究は、過去と現在とを共に深く理解できるようにインド史を解釈したいという熱望から始まったものでございます。そのような理解のためには歴史分析こそが基盤となるというのが、私の信念であります。

インド史の再構築は、とりもなおさずアジア史の再構築であり、これとの関連抜きには語ることはできません。かってのヨーロッパ的歴史観は西欧中心のものでありました。私は同世代の研究者たちとともに、アジアにおける遺産と絆を歴史観へと統合しようと試みてまいったわけであります。

本日、ここにこうして、私自身が、この偉大な都市である福岡と、そして日本の文化と絆を結ぶことができましたことは、この上ない喜びであります。私を推薦し、この賞を与えてくださいました皆様、そして福岡市と福岡市民の皆様に深く感謝申し上げます。今後とも皆様方の暖かい励ましに応えるように精進してまいりたいと思います。

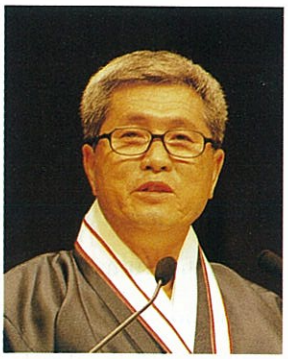
本当にありがとうございました。

樋口　隆康

今回、国際的にも大変有名で、意義のある「福岡アジア文化賞」を頂きましたことにひとしおの感慨を抱くところでございます。と申しますのは、私は一介の考古学徒として、アジアの様々な地域の古代文化遺跡の発掘やその文化の解明にずっと携わって参りましたが、こういう仕事で社会に対して大きな貢献ができるとは一度も考えたことがございませんでした。しかしながら、今回この福岡アジア文化賞という非常に名誉な賞を頂きましたことで、私が今までやって参りましたことが、いささかなりとも社会の発展のために何かお役に立っていると保証していただいたのではないかと大変光栄に思っております。

福岡という街は、御承知のように2千年前の弥生時代から鴻臚館の奈良時代を経て近代に至るまで、外国文化の受入窓口として日本の社会の中で、非常に大きな役割を果たしてきたわけでございます。この「福岡アジア文化賞」が、そういった福岡の特色をアジア諸地域に広くお披露目し、さらには国際交流を促進していく一つの起爆剤として、21世紀の日本が目指している国際交流の推進力として、今後ますます発展していくことを念願いたします。

私としましてもどこまで御協力できるかわかりませんが、これまでの研究を続けていくことで、福岡の国際交流のために少しでもお役に立てれば、また様々な事業の良き助言者としてお役に立つことができれば大変幸せだと思っております。その決意を御披露いたしまして今回の受賞のお礼の御挨拶に代えさせていただきます。どうも、ありがとうございました。



林　権　澤

私に、この福岡アジア文化賞を授けてくださった福岡市並びに審査委員の皆様に心より感謝申し上げます。

福岡アジア文化賞の受賞は、私に、映画と人生について、もう一度振り返る機会を与えてくれました。

私は、韓国が日本の植民地だった1936年に、朝鮮半島の南端に位置する全羅南道長城で生まれました。物心がつく頃には、すでに第二次世界大戦も終わり、植民地から解放されましたが、まもなく朝鮮戦争が起こりました。

幼い私にとって朝鮮戦争は、何一つ判断の対象になり得ないものでした。

朝鮮戦争がイデオロギーによる戦いであり民族の分断をもたらしたという事実は、かなり後になって、つまり、大人になってから初めて理解できたことでした。

本当に戦争に苦しめられたと実感したのは、家族が左翼と右翼に別れ、仇や敵として対立したときでした。戦争が終わり、左派であった私の家族は苦しみを味わわなければなりませんでした。

私は17歳の時、家を出てしまいました。

私は、その時のいくつもの恐怖や不安、絶望や怒り、ため息や憎しみばかりの辛い日々から逃げ出したかったのです。

しかし決して逃げ出すことはできないのだということを知ったのは、既に家を飛び出した後でした。

私は韓国映画が産業として定着する以前から映画の現場で仕事をすることになりました。

1962年に初めての作品『豆満江よ、さらば』を作りましたが、私は体系的に映画を学んだことがなく、映画に関する全てのことは現場で学ばなければなりませんでした。

私は映画狂でもなければ、ましてや映画の仕事を始めたとき、映画芸術家になりたいなどと考えたこともありませんでした。

その当時、私にとって映画は、まだ朝鮮戦争の傷跡が消えない韓国で、生計を立てることのできた唯一の職業でした。

私は、映画を興行的に成功させなければならない「職業映画監督」として、10年あまりの期間に約50本の作品を「乱作」しました。

そして、だいぶ後になってから、映画というものが単に人々の観賞の対象であるだけでなく、時には感動を与え、人々に人生を振り返る機会をもたらすものだという事実を知りました。

私は職業としての映画監督という枠を越えて、果たして自分は一人の芸術家としての映画監督にふさわしいのかどうかについて、自らを反省しました。

映画は私一人のためのものではなく、人々が出会い、言葉を交わし、考えを分かち合い、その中に私たち全ての感情や情緒が盛り込まれるものだということを知ったのです。

私が映画の中で一貫して描きたいと思う主題は「人本」つまり人を世の中心に位置づける心です。

そして、人々が共に生きる世の中において、人が人を尊重する社会にならなければいけないという考え方です。

どうもありがとうございました。

記念講演会

日　時：9月26日(金)　　午後6時～8時
場　所：アクロス福岡イベントホール
参加者：約600名

1　樋口 隆康氏　　「考古学と五十年」

樋口隆康氏が、考古学者として歩んできた半世紀にも及ぶ人生を振り返り、考古学との出会い、研究者としての転機、シルクロードにおける発掘調査の成果などを次のように語った。

樋口氏の学生時代の頃の考古学は、毎日のように新聞に遺跡発掘のニュースが出る現在とは違い社会的認知は薄かった。しかし、旧制高校時代には、古美術、なかでも和辻哲郎の「古寺巡礼」やスタインの中央アジア探検に惹かれ、考古学という学問に興味を持った。そして和辻哲郎氏との出会いにより京都大学進学という将来方針を決めた。

大学入学後は、梅原教授のもとで初の海外調査となる楽浪古墳(中国漢代)発掘や高句麗古墳壁画との出会いを体験でき、その後の九州の珍敷塚（めずらしづか）壁画にある太陽のシンボル「カエル」の絵を最初に発見する手掛かりとなった。終戦後は京都大学へ戻り本格的に考古学の研究を始めたが、国内調査に限られていた。

そして1957年にシルクロード調査への参加という転機を迎えた。日中国交が開かれていないなか、中国政府の招きで日本考古学会訪華視察団一員として広州・南京・安陽・西安・四川・敦煌などを巡り、以後約20年間インド、パキスタン、アフガニスタンの仏教遺跡調査を実施した。中でも印象的だったのが二大石仏と豊富な壁画で知られるアフガニスタンのバーミヤーン遺跡調査。それまで特定の石窟のみの調査に限られていた石窟寺院群の全貌を解明するとともに全壁画のカラー写真による記録保存を行った。大学を定年退官後もシルクロードとの関わりは続き、現在はシリア・パルミラの古墳発掘に携わっている。現在、シルクロードの専門家として知られるようになったが、最初からその道を目指したのではない。恩師の指導のおかげで興味を持ち研究を続けた結果である。師に恵まれ、仲間に恵まれ、まさに幸運な環境が自然と今日の自分をつくってくれたと思っている。

最後に、アフガニスタン北部のバクトリア都市遺跡から出土したギリシア語碑文「賢しき人間の生涯」を自身の信条として紹介し、力強く公演を結んだ。

2　ロミラ・ターパル氏「自伝ノート」

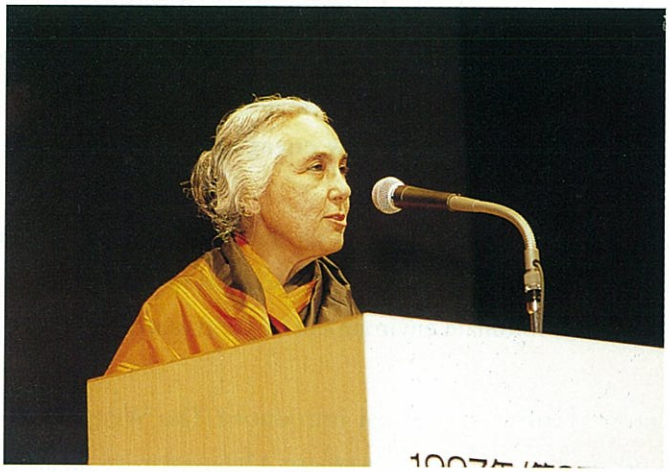
ロミラ・ターパル氏は、歴史学者としての人生を振り返り次のように語った。

パンジャーブ人の両親のもと、3人兄弟姉妹の末子としてラクナウ市で生まれた。父が軍医であったことから子供時代にはインド各地を転々とした。

大学では当初、植物学、文学、歴史学に興味を持ったが、当時のインドは独立直後であり、国民運動と独立に深い感銘を受け歴史への関心が大いに高まった。インド人のアイデンティティを明確にするために歴史学は中心的役割を担っていると考えたことや、インド人のルーツを調査したいという希望から歴史学とくに古代史に強く惹かれたが、直接的な理由としては、古代インド彫刻に関心があった父の影響が大きかった。留学先のロンドン大学東洋アフリカ研究学部にアジアの歴史、言語研究課程があったことから大きな刺激を受け、博士課程へ進み、研究者の道を歩むことになった。

博士課程終了後、インドで研究者の道を進みたいと考えたが、当時、女性を取り巻く環境は厳しく、女性が研究の最前線にいることなど期待されていなかった。自分がインドで職を得て、続けることができたのは幸運と家族の協力のおかげと思っている。クルクシェートラ大学を経て、1960年代にはデリー大学で歴史を教えた。この時、インド史には様々な解釈があり、まだまだ新鮮な分析が必要であることを認識した。1970年代にはジャワハルラール・ネルー大学で歴史教育センター設立に多大な労力を費やし、1970年から1980年にかけては、数多くの論文を執筆、なかでも「リニィジから国家へ」によってインド古代史の未発達な時期に対する新たな視点を提示するなど自分にとって創造的な時期を過ごした。

教職引退後もインド内外から講演の招待を受けたり、学会誌やセミナーのために論文を書いたりと多忙な生活を送ってるが、詩を読んだり音楽を聴いたりする時間を待ち望んでいると述べて講演を結んだ。



3　林 権 澤　氏　「私の人生、私の映画」

林権澤氏は、自身の映画と人生について振り返り次のように語った。

韓国の全羅南道に生まれ、朝鮮戦争の後、家族が左派であったことから、大変な苦難を受け、17歳の時に家出をした。しかし、映画を作るとき思い出すのは常に父と母のことであり、映画を作ることによって、自分の中の「韓国人」という原型意識を模索している。

映画の仕事を始めたときは、映画芸術家になりたいと考えたこともなく、現場で映画を学び、職業監督として10年以上多数の映画を作り続けたが、自費製作の『雑草』という作品で初めて自分自身の人生を反芻し、映画を通して自己を表現するようになった。

1970年代は韓国人にとって辛い時期であり、映画会社も統廃合され少数の映画しか作られなかったが、自分にとってはかえって、映画を興行的に成功させなければならないという脅迫観念から抜け出す機会になった。映画は、私たちがいつも現実の中を生きているという真実と向き合うことであり、現実から希望を見いだすことである。現実と向き合うことを避けて映画に逃げ込んだが、映画を作り続けることで、結局再び現実と向き合うことになった。

映画監督は植物と同じように、自分が生まれ育った所から抜け出すことはできない。『風の丘を越えて－西便制－』で描いたように、世の中の秩序の中に生きながら「恨」（ハン）を抱き、「恨」を受けとめながらより大きな秩序を作り出すことこそが、世の中に対する憎悪から許しを学ぶ方法である。この作品によって自分の「人本思想」は、哲学的な概念を越えて芸術的な信念になった。

アジアの映画監督は、西欧の映画が作り出す速いイメージの流れに追いつこうとするのではなく、その流れから離れ、もっとゆっくりと進まなければならない。画面をぎっしりと埋め尽くす代わりに、空白を残すべきである。空間がありながら埋め尽くされ、埋め尽くされていながら空間があるのがアジア文化の想像力の伝統である。それはアジアという同じ文化的背景を持ち同じ危機にさらされている我々が、共に創り守って行かねばならない新しい映画の伝統である。そして、西欧とアジアはお互いの創造を通して知恵を分かち合うことによって、映画の第二の世紀の調和のとれた新たな構図をうち立てることができるだろう。自分の作品がそのための努力の一部になることを心から希望していると述べて、林権澤氏は講演を結んだ。

4　チェン・ポン氏 「カンボジア芸術の神髄」

チェン・ポン氏は、自分の生い立ちと演劇との関わり、そしてカンボジアの文化復興活動の経緯と将来の目標について以下のように語った。

若くして孤児となったチェン・ポン氏は、寂しく辛い少年時代を過ごした。苦学して小学校を卒業後、プノンペン国立師範学校に進学したが、自己の境遇に嫌気がさし、勉強もせず、自分の宿命に絶望した日々を送っていた。そのような状況の中で、現実の自分とは別の人物や人生を演じることができる演劇に引かれるようになった。しかも悲観的な実生活と対照的な喜劇役者を演じるのが好きだった。

そして師範学校卒業後、教職に就かず国立舞台演劇団に入団した。

そこで、演劇の師となるハン・トゥン・ハク教授と出逢ったことがその後の人生に大きな影響を与えることとなった。ハク教授の熱意ある指導と強い勧めによって、芸術学教授の試験に合格することができた。今日の自分があるのは全くハク教授の多大な好意といつも変わらぬ支援のおかげである。

演劇を通じて自覚したことは「俳優であることほど幸福なことはない。」という点である。舞台は宇宙そのものであり、幕が上がるとともに命が生まれ、幕が降りるとともに死んでゆく。自分は「演劇が人生であり、逆に人生が演劇でもある。」と考えている。

人々を天上の幸福へと導く使命を持つ演劇は、人の生涯において教訓と勇気を与えてくれる非常に重要なものと認識している。そして、芸術文化事業は世界の人々を密接に結びつけ、相互理解を深め、お互いに寛容で平和的に共存共栄する方向へと導く。

しかし、芸術文化の保存と伝承は、多くの障害と苦労が伴うものである。カンボジアにおいても、60年代の内戦的状態から70年代のポル・ポト政権時代にかけて、ほとんどの伝統的な芸術文化は破壊され、死に絶えようとしていた。同氏は、国内各地を巡って地道な復興活動を続け、民衆自らがこの復興活動に積極的に参加するように努めてきた。このようにして、自分たちの文化の真の価値を認識することによって自分のアイデンティティを発見し、人間らしく生きることに結びつくのである。

今後も文化活動とともに調査、研究、収集、保存を続け、劇場の開設を行い若い世代の教育と普及活動に取り組むことが必要である。

現在自分の生涯の目標は二つある。クメールの芸術文化を再活性化することと、クメール的価値観や道徳・哲学を復活させることである。

チェン・ポン氏は以上のことを力説し、今回受賞した福岡アジア文化賞・大賞を、勇気あるカンボジアの芸術家たちや恩師たち、そしてすべてのカンボジアの文化人たちに捧げたいと述べて講演を結んだ。

古代文明交流フォーラム

日　時：9月26日(金)　　午後1時30分～4時30分
場　所：アクロス福岡イベントホール
参加者：約350名

1　テーマ　「パルミラから鴻臚館へ～シルクロードの風～」
2　プログラム

基調講演　福岡アジア文化賞学術研究賞国内部門受賞者　　樋口　隆康

パネル・ディスカッション

パネリスト

樋口　隆康
奈良大学文学部教授　　泉　拓良
古代オリエント博物館研究員　　宮下　佐江子

コーディネーター

九州大学文学部教授　　西谷　正

3　概　要

樋口氏が、オリエント、地中海世界、エジプト、小アジアの交通要衝に位置する「パルミラ」発掘調査状況を基調講演で述べたのを受け、調査隊員の泉拓良氏、宮下佐江子氏の両氏がそれぞれ独自の視点から見た発掘成果を披露。ＯＨＰを用いて人工衛星による映像、地中レーダーによる未発掘地下墓の発見などの興味深い事例を報告。その後のディスカッションでは、シルクロードを介した壮大な東西文明交流について、ニケ神と飛天との関係、キリアテペ冠の藤ノ木古墳への影響、藤ノ木古墳出土の馬具類の亀甲紋などの事例により、パルミラ芸術や文化が中央アジア、東北アジア、九州日本へと連なっていく様子が述べられた。

最後に西谷氏が、福岡の鴻臚館遺跡出土品の中に中国陶磁器、イスラム陶器が含まれることや衣装デザインとして連珠紋が伝わっていることから、鴻臚館は、シルクロードを通じて東西の文物や人々が行き交う、現代の福岡のルーツとなる国際色豊かな機能を備えた施設であったと語り終了した。

樋口　隆康氏
Professor Higuchi Takayasu

西谷　正氏
Professor Nishitani Tadashi

インド研究フォーラム

日　時：9月27日(土)　午後1時～3時30分
場　所：福岡市役所15階講堂
参加者：約200名

1　テーマ　　変わりゆくインド・変わらざるインド
2　プログラム
基調講演　福岡アジア文化賞学術研究賞国際部門受賞者　　ロミラ・ターパル
パネル・ディスカッション
パネリスト
ロミラ・ターパル
大正大学文学部教授　　辛島　昇
コーディネーター
京都大学東南アジア研究センター教授　　應地　利明

3　概　要

基調講演において、ターパル氏は古代インド史の解釈と歴史記述の様々な変化について触れるとともに、古代史の研究が現代社会の問題にどのようにつながっていくかという歴史的な文脈の中で現代をとらえる重要性を指摘した。

引き続いて行われたパネルディスカッションでは、應地氏が歴史家の役割について問題提起を行い、ターパル氏は現代社会においては過去にも比して大きな役割を担うようになったと述べるとともに、辛島氏も歴史家の研究は常に現代に戻って、現代の問題に対して過去がどのような回答を与えてくれるのかといういわば過去と現代との対話ということが大切だと主張した。さらに具体的に、経済体制、カースト制度、ヒンズーとイスラムとの対立、女性の地位など独立後のインド社会の変化と課題に関して、歴史家の目からみた解釈が議論された。

最後に應地氏が歴史的に物を見ることの重要性と歴史的に捉えたインドの事実というものが、日本のアイデンティティを考える上でも重要な意味を持つと要約して終了した。

ロミラ・ターパル氏
Professor Romila Thapar

辛島　昇氏
Professor Karashima Noboru

林権澤、小栗康平と語る

日　時：9月27日（土）午後1時50分～5時
場　所：福岡市総合図書館映像ホール（シネラ）
参加者：約200名

1　テーマ　　「アジアの表現が世界を変える」
2　プログラム
　作品上映　「風の丘を越えて－西便制（ソピョンジェ）－」
　対　談　福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者　　林　権　澤
　　映画監督　　小栗　康平
3　概　要

『風の丘を越えて－西便制－』の上映に続き、林権澤氏と小栗康平氏の対談が行われた。小栗康平氏は、『西便制』を再び観ることができて感動を新たにしたと、この映画を賞賛した。林権澤氏は、映画作りの姿勢を「常に人が人を尊重する社会になって欲しいという願い」とし、小栗氏の監督作品『眠る男』の独特の時間の感覚や『西便制』の根底に流れる「恨」（ハン）について語った。「恨」は韓国人の心の中に積み重なった悲しみであり、「恨」を静めて、自分自身に打ち勝っていく韓国人の生き方を描きたかったという。小栗氏は、生まれ育った土壌に根差した映画作りがアジア映画の将来にとって大切だと、林氏の映画作りの姿勢を高く評価した。林氏は、文化を花にたとえ、地域で独自の花が咲くことでアジアに美しい花畑ができると、地域の文化の多様性が花開くことを期待し、「韓国という小さな花を映画の中に表現して、普遍性、そして共感を得るような監督になりたい」と語った。

対談
Dialogue

カンボジア文化復興フォーラム

日　時：9月28日（日）午後3時～6時30分
場　所：イムズビル9階　イムズホール
参加者：約250人

1　テーマ　　「クメールの微笑み」
2　プログラム

基調講演　福岡アジア文化賞大賞受賞者　　チェン・ポン

古典舞踊と影絵芝居の解説・公演

○カンボジア古典舞踊へのイニシエイション（身体・精神表現の基礎訓練等）
○古典舞踊（タヤー・ダンス、ゴース・ダンス、メカラ・ダンス）
○影絵芝居（ラーマーヤナ物語）

パネル・ディスカッション

パネリスト

チェン・ポン
上智大学外国語学部長　　石澤　良昭

コーディネーター

都留文科大学文学部教授　　小倉　貞男

3　概　要

基調講演において、チェン・ポン氏は祖国の抱えている困難の原因が、カンボジア人のアイデンティティであるカンボジアの心、魂を見失ったことにあり、それはバイヨン寺院にある四面仏尊顔の「クメールの微笑み」に象徴される４つの美徳・道徳であると指摘した。そして、伝統文化の再生を通じて、人々の心にクメールの美徳・道徳を復活させ、物質面と精神面の調和を図ることが必要と持論を述べた。

引き続き、チェン・ポン氏の解説を交えながら同行公演団による古典舞踊と影絵芝居が披露された。

また、パネルディスカッションではチェン・ポン氏の実践活動と「カンボジアの文化復興はカンボジア人の精神復興」という理念が紹介され、物質文明と心の関係、本当の豊かさの意味が問い直された。そして、カンボジアの民衆の自然と村落と文化を調和させる伝統的な生き方の中に、２１世紀へ向け日本も学ぶべきものがあるとの提言がなされた。

チェン・ポン氏
Professor Chheng Phon

石澤　良昭氏
Professor Ishizawa Yoshiaki

小倉　貞男氏
Professor Ogura Sadao